

## 宝頂山墓地碑銘

・四代家長夫妻墓（五輪塔）



源庵

常本居士

（生駒家長戒名）

椿岩

妙寿大姉

（同妻戒名）

・五代利豊夫妻墓（家型廟）



（正面）

従五位下藤原生駒氏

因幡守利豊

覚海院殿

空山露月居士

寛文十庚戌曆

四月廿六日

世寿九十六歳

自号空山露月

（左側面）

利豊誕小折營本丸 神明氏

社也童名五郎八小田原役十

六歳天正十九曆十一月廿八

日叙従五位下任隼人正宗直

口宣上卿中山大納言右大辨

葉室頼宣奉也外領三洲秀次

奥州軍於武洲清戸夜騒利豊

早制之有感關原役當城可越

勢肯岐阜黄門以土方藤藏小

川久右衛門通利豊石田三成  
謀前野兵庫大島又右衛門來  
状不肯秀信臣津田藤三郎出  
北方邑諫之福島正則小山出  
陣來小折有約終不食其言小  
勢入清州城人感之岐阜攻七

（裏面）

曲先驅其徒森勘解由林藤十  
郎也關原合戦進先隊宇喜多  
本陣有銃士合鏑突倒秀家小  
姓頭足立勘十郎者也利豊歩  
卒小倉藤六來持首足立具足  
黒掛綴毛算先熊淺縹巾裏頭  
利豊鏝縫延毛箒金赤纒印鳥  
毛白招取首刀長光依遠山源  
兵衛望遣之持鏑不續數鏑関  
之冶工鋒缺乘放馬鞍鐙者作  
也紋三龜甲山口修理亮手取  
引返之従卒澤田平左衛門林  
七右衛門西嶋久三郎清洲彌  
吉各獲首知敵名事秀家士粟  
井半右衛門後号半入與足立  
同戦其場見之後於九州四國  
語之利豊鏝無紛其場也中将  
忠吉卿為尾張主

（右側面）

神君渡御于大坂遣石井主水  
乞利豊還邑号大炊助長知也  
忠吉卿薨後池田輝政招欲至  
幡州

神君於駿府議先方国士 命  
平岩主計頭留地屬義直卿改  
因幡守利豊同役従竹腰正信  
在生靈先陣崩利豊踏止乘馬  
先進無敵正信揚聲制之阿部  
河内大道寺玄蕃在其場歸陣  
玄蕃以中川莊藏請利豊具足  
羽織與之熊紅裏襟鳥毛志水  
忠宗陣後爲祝招正信望利豊  
一人爲伴客云矣

愚息利勝誌之

（訳）  
従五位下藤原生駒氏  
因幡守利豊

覚海院殿空山露月居士

寛文十（一六七〇）年庚戌歳四月

二十六日世寿九十六歳 自ら空

山露月と号した。

利豊は小折城の本丸で誕生した。

神明は氏神である。童名は五郎八  
という。小田原の役には十六歳で  
あった。天正十九（一五九一）年  
十一月二十八日、従五位下に叙さ  
れ、隼人正に任じられた。（豊臣）  
宗直の口宣のとき、上卿は中山大  
納言、右大弁葉室頼宣が奉じ、外  
に三洲を領した。秀次の奥州征  
伐のとき、武洲清戸で夜騒ぎがあ  
った。利豊は素早くそれを鎮め、  
感心された。関ヶ原の役のときは  
小折城に味方になってほしいと  
岐阜黄門（織田秀信）が土方藤藏、  
小川久右衛門を使者に立て、石田  
三成は前野兵庫、大島又右衛門と  
図って手紙を寄越した。しかし利  
豊はこれに応じなかった。秀信の  
家臣、津田藤三郎は北方村まで出  
向いて諫めたが、福島正則が小山  
出陣のとき、小折まで来て交わし  
た約束があるので、その約束を最  
後まで守った。小勢で清洲に入城  
したが、人々は感心しきりだった。  
岐阜の七曲を攻めるとき、先方は  
森勘解由、林藤十郎であった。関  
ヶ原の合戦では先方隊として進  
軍した。宇喜多（秀家）の本陣に  
は銃士がいた。鏑を合わせ突き倒  
した。秀家の小姓頭、足立勘十郎  
と云う者であった。利豊は歩卒の  
小倉藤六に首を持たせた。足立の  
具足は黒の掛けおどし、草ずりは  
熊の毛で覆い、浅黄の布で鉢巻き  
をしていた。利豊の鏝は縫い延べ、  
草ずりは金おどし、赤母衣に鳥毛  
の白を目印とした。首を取る刀  
（脇差し）は長光の作、遠山源兵  
衛が望んだのでこれを遣わした。  
持ち鏑は続かず、数鏑は関の鍛冶  
で鋒（ほさき）を欠いた。乗り捨て  
た馬の鞍・鐙は作形で紋は三龜  
甲であった。山口修理亮の手のも  
のが引取っていたので返しても  
らった。従卒の沢田平左衛門、林  
七右衛門、西嶋久三郎、清洲弥吉  
の各々が首を獲った。敵の名を知  
ることができたのは、秀家の士で  
栗井半右衛門、後に半入と号した  
者が、足立とともに戦い、その場  
で見えていたからである。後に九州

四国でこれを語った。利豊の鎧は紛れもなくその場のものであった、と。中将忠吉卿が尾張の主となった。神君(家康)が大坂に渡御したとき、石井主水を遣わして利豊に帰郷を請うた。(そのときは)大炊助長知と号していた。忠吉卿が薨じた後、池田輝政の招きで播州へ行くこうとしていた。神君は駿府で議し、先方の国士(尾張衆)を平岩主計頭に命じてその地に留めさせ、義直卿の付属とした。(このとき)因幡守利豊と改めた。同役(大坂の陣)では竹腰正信に従い生玉に在った。先陣が崩れたが、利豊が踏み止め、向かうところ敵なしで馬に乗って進んだ。正信は声をあげて制止した。阿部河内、大道寺玄蕃がその場にいた。帰陣して玄蕃が中川莊藏を立て、利豊の具足羽織を所望したのでこれらを与えた。熊皮で裏地が紅の襟に鳥毛を使ったものであった。志水忠宗は、その陣の後、祝宴に正信を招いた。利豊一人が望まれて伴客になったと云う。愚息の利勝がこれを誌す。



(正面)

了応院殿  
圭巖寿白大姉

寛文七丁未曆

正月初七日

世寿八十二歳

(左側面より、但し風化して読めず、いま生駒家文書から書抜き、意味の区切りを示すに留めた。)

圭巖寿白大姉 祖勢州賀藤次景  
廉家嫡 濃州福岡城主 遠山安  
芸守景友流 左近太夫友勝末孫  
同邦苗木城主 遠山友政長女也

嫁于利豊 岡崎三郎源信康主室  
織田信長公長女 号見星院殿  
出清洲邑 小折家長宮本丸住居  
依由緒也 尾張領海東郡溝口  
知多郡半田成岩三村内被属 其  
高千八百五十余石也 于時旧信  
長公従女 亀女茶女供奉 家士  
埴原加賀守護之 村内在田代云  
所 数年之後 被移京師 其領  
知利豊為支配 岐阜軍和睦 于  
時依 台命 黄門秀信卿 以由  
跡故 被移小折 利豊供奉送之  
還 関原福島正則家士圍之 従  
此秀信卿被至勢州浅熊 為後代  
利勝誌之

(訳)

了応院殿圭巖寿白大姉

寛文七(一六六七)年丁未歳

正月七日 世寿八十二歳

圭巖寿白大姉、その祖先は勢州加藤次景廉の家嫡である濃州福岡城主、遠山安芸守景友の流れをくむ。左近太夫友勝の末孫、同邦苗木城主、遠山友政の長女である。利豊に嫁した。岡崎三郎源信康は織田信長公の長女を室とし、見星院殿と号した。清洲邑を出て、小折の家長が城の本丸に住んだのは、由緒に依るものであった。尾張領の海東郡溝口、知多郡半田、成岩の三村内に領地を持ち、その高は千八百五十余石あった。当時、旧信長公の従女であった亀女(おかめ)と茶女(おちゃあ)とがお供をし、家士の埴原加賀守がこれを護衛した。村内の田代と云う所に居住した。数年後、京都に移られ、その領知は利豊の支配となった。岐阜の軍で和睦となった。この時、ご命令により、黄門秀信卿は親戚ということで、小折に移された。利豊が供をしてこれを送り帰郷した。関ヶ原では福島正則の家士として包囲に加わった。これにより秀信卿は勢州浅熊に行かれた。後代のために利勝がこれを誌す。

・十代周房墓碑



生駒大膳亮従五位下藤原周房

宝勝院殿泰道嘯山居士

安永九<sup>庚</sup>子十月十日

一般社団法人

生駒屋敷 歴史文庫